

特集

東日本大震災から3年



満員の聴衆が〈ふるさと〉を合唱した《きぼうの音楽会》in いわき（2012年3月22日、いわき芸術文化交流館アリオス）

こんな時だからこそ、音楽を

震災直後から広がった音楽などの公演自粛ムードの中で、読響は発生8日後の3月19日、演奏活動を再開した。東京芸術劇場での《マチネーシリーズ》。当時正指揮者の下野竜也（現首席客演指揮者）のタクトで、まず、犠牲者への哀悼を込めてバッハの〈G線上のアリア〉を演奏。その後はブラームスの名曲などが、節電のため肌寒く薄暗かった会場に響いた。公演再開に合わせて会場では被災地支援への募金活動もスタートした。

募金活動の先頭に立った下野は、プログラム冊子「月刊オーケストラ」の翌4月号でこう記している。「こんな時だからこそ、音楽をと思い、ステージに向かい、ひたすら祈りながら指揮をさせていただきました。（中略）1日も早い復旧と

2011年3月11日に発生した東日本大震災から3年を迎える。この震災による死者は1万5884人、行方不明者は2636人（2月10日現在警察庁まとめ）で、仮設住宅などで暮らす避難者は27万306人（1月18日現在復興庁まとめ）。被災地では復旧、復興に向けてたゆみない努力が続けられている。震災から今日まで、読売日本交響楽団はオーケストラとして、また楽団員個人やグループとして、音楽を通じてどんな動きかけをしてきたのか。3年間の活動の中からいくつかを振り返り、そのときの人々の言葉をまとめて、これから続く復興支援に向けた活動につなげたい。（編集部）

復興を願うと同時に、いろいろな可能性を探り、被災地の皆様への一助となるような活動を続けていきたいと思います」

2か月後の5月末には、弦楽四重奏のアンサンブルが福島県二本松市と郡山市を訪ねた。避難所暮らしが続く被災者の方々に〈星に願いを〉〈見上げてごらん夜の星を〉〈ふるさと〉などを届けた。コンサートの模様を伝えた読売新聞福島版に



読響コンサート「響け！この想い。」（2011年5月29日、福島県郡山市・かんぼの宿）

は、南相馬市から避難してきた元音楽教師の男性のコメントがある。「先が見えない不安から心が満たされない生活の中で元気をもらえた」。このときのメンバーに加わったヴァイオリンの杉本真弓はこう語っている。「最初は被災者の方々の表情がとても硬かった。震災から日数がたっても、家には戻れず将来への不安がとても大きかったのだと思います。演奏が進んでお話などもしているうちに本当に少しずつ少しずつ微笑まれたりしてきました。〈ふるさと〉の演奏のときにはこころの中かしみ出すような歌声が聞こえてきました」

音楽はときには言葉よりも大きな力

常任指揮者のシルヴァン・カンブルランは、震災翌月の4月には来日して読響を率いた。読売新聞の連載「声援 復興めざして」にも登場し、「私の仕事である音楽は、人々が感情を共有していく支えになると信じております。音楽は時に言葉よりも大きな力となるのです。皆さんは決して1人ではありません。世界中の人が応援する気持ちでいます。一歩ずつでも前に進みましょう」と呼びかけた。

その年の9月23日から25日にかけては、フルオーケストラで盛岡市、青森県六ヶ所村、秋田県大館市を訪ねた。日本交響楽振興財団が主催する事業。読響は仙台市にゆかりが深い梅田俊明氏の指揮でヴァイオリン独奏に宮本笑里さんを迎え総勢71人の布陣で臨んだ。復興支援コンサートとして開かれた盛岡公演で



読響ハートフルコンサート福島（2012年6月8日、福島県立医科大学付属病院）

は、「この作品で精一杯の元気を届けた」（梅田氏）と、アンコールでブラームスの〈ハンガリー舞曲第6番〉を披露した。

私たちのほうが励まされている

2012年3月22日。被災地での復興支援特別公演として《きぼうの音楽会》が福島県いわき市の芸術文化交流館アリオスで開かれた。被災地の約1700人を招待し、下野竜也指揮の読響はドヴォルザークの交響曲第8番などを演奏。最後は会場全体で〈ふるさと〉を合唱し、涙ぐむ人の姿もあった。タクトを振った下野は「言葉にならない体験で、私たちのほうが励まされた。この思いを忘れずに今後も演奏をつづけたい」と感動を語った。

入院患者の方々に音楽を届ける《読響ハートフル・コンサート》も被災地を訪ねた。この年の6月8日には福島市の県立医大病院で、ヴァイオリン赤池瑞枝、小田透、ヴィオラ三浦克之、チェロ渡部玄一の弦楽四重奏がクラシック曲に〈会津磐梯山〉なども交えて8曲を演奏、入院中の女性患者は「震災で大変な思いをしたけれど、伸びやかな音色に癒され、ジーンときました」と話している。

まるで別世界にいたい

2013年3月6日。2度目の《きぼうの音楽会》が宮城県名取市で開かれた。梅田俊明氏の指揮で読響のフルオーケストラがベートーヴェンの交響曲第7番などを演奏。200人が招待された被災者の一人で、津波で自宅を失った60代の女性は「まるで別世界にいたい、自然に涙ができました。心がいやされます」と話した。

そして2014年3月3日、福島県いわき市の芸術文化交流館アリオスで3度目

の《きぼうの音楽会》が開かれる。タクトを振る特別客演指揮者の小林研一郎は地元のいわき市出身でふるさとへの強い思いから、震災後はたびたびチャリティーコンサートを開催。その収益は寄付金として、流されてしまった学校の楽器購入などにあてられている。またコンサートマスターの日下紗矢子は兵庫県出身で1995年の阪神・淡路大震災のときには、東京で高校生活を送っていたが、家族が避難所暮らしを経験している。今回はそんな二人の思いも込めて読響が、ラヴェル〈ボレロ〉などを演奏する。

「いつまでとは考えない。 音楽を通じて働きかけを続けていく」

—— 篠崎卓美（トロンボーン奏者）

読響メンバーの中には被災地の出身者もいる。トロンボーンの篠崎卓美は、いわき市の中心部に実家があり、高校時代までを過ごした。震災で家族は無事だったが、友人、知人には犠牲者も出た。震災直後は、可能な限り東京といわきを往復して食糧や物資を運んだ。壊滅的な被害にあった沿岸地域の惨状を見て「自分には何ができるのか」と悩んだという。そしてたどり着いたのが「自分のやれることは音楽しかない。音楽でとにかく働きかけよう」という決心だった。同じいわき出身でトロンボーン奏者の黒金寛行氏（NHK交響楽団）と一緒に首都圏でチャリティーコンサートを開き、収益を

いわき市や福島県の学校の楽器購入費用に寄付する活動を続けている。CDも製作・販売し、売上から寄付をしている。

厳しいスケジュールの中でも、吹奏楽を教えている高校に足を運んで、生徒たちに接して演奏を指導して励ます活動も継続している。最近感じることは、「3年たってもまだこんな状態なのか」という時間の経過と現実とのギャップだという。しかし、その一方で、とどまってはられないという自分がある。「いつまでとは考えない。これからもいわきに向けて福島に向けて、僕のできる音楽を通じて働きかけていきたい」と話した。

「仲間たちが立ち上がってくれた。 とてもありがたくて」

—— 井上俊次（首席ファゴット奏者）

首席ファゴット奏者の井上俊次の実家は宮城県石巻市のやや内陸部にある老舗の「サルコヤ楽器店」。津波の被害で店は壊滅状態になった。井上は2011年5月、オーボエ奏者で妻の恵子さんとともに、避難所になっている母校の石巻中学校体育館でコンサートを開いた。ディズニーメドレーから〈小さな世界〉や〈星に願いを〉。そして〈ふるさと〉や〈翼をください〉など計13曲を演奏した。

「これからどうしたらいいのかと沈み込んでしまったみなさんの心を、なんとかひと押ししたかった」と当時の心境を話す。避難所での演奏を続けるなか、楽器店を営む父親の晃雄さんは、店の再開を決意し、その年の8月

には営業を開始した。その不屈の活動の様子がテレビ番組でも取り上げられ、ボランティアや音楽仲間など多くの人々の力が結集されたという。

井上の東京芸大時代の同級生やヴァイオリンの薄田真ら読響の仲間たちも「サルコヤ楽器店」の再生と市内の被災した学校の吹奏楽部の援助のために活動を続けており、都内の教会などで開く「Save Tohoku Charity Concert」で得た収益を寄付している。すでにその開催は20回を数え、多くの読響メンバーも参加している。「みんなが手作りで準備をしてくれて開かれるコンサート。とてもありがたくて、音楽での絆やつながりが身にしみて」。井上は感慨深く語った。



あなたが選ぶ 2013年の 「感動の公演」 結果発表

1位

指揮：スタニスラフ・スコロヴァチェフスキ

スコロヴァチェフスキ／
パッサカリヤ・イマジナリア
ブルックナー／
交響曲第4番〈ロマンティック〉

第530回定期演奏会（10/12）
第159回東京芸術劇場マチネーシリーズ（10/14）



©読響（撮影：堀田力丸）

げたと行って過言ではないでしょう。

作曲家でもあるスコロヴァチェフスキが、同時代を生きた偉大な先輩として尊敬してやまないショスタコーヴィチ。その代表作、交響曲第5番を取り上げたプログラムが第2位に選ばれました。

♪ショスタコーヴィチの5番。やはりスコロヴァチェフスキの魅力が凝縮され、ブラボー！一言です。（IFさん）

このプログラムを演奏した10月3日のコンサートは、マエストロの90歳の誕生日でした。交響曲の後にはオーケストラからサプライズ演奏をプレゼント！お客様にも、歌と一緒に祝っていただきました。

♪スコロヴァチェフスキ翁のお誕生日。分かって聴きに行ったんだけど、それでもやはりオーケストラによる〈ハッピーバースデー〉が素晴らしくて、泣きそうになった。90歳の

年末にその年の「感動の公演」を募集して、本誌3月号で発表するようになって今年で3年目。お客様が選んだ2013年の「感動の公演」は、90歳の桂冠名誉指揮者、スタニスラフ・スコロヴァチェフスキが指揮した二つのプログラムが見事なワンツーフィニッシュを飾りました。

第1位は、巨匠が最も得意とするブルックナー。年齢を感じさせない、活き活きとした音楽づくりで満場の聴衆を魅了しました。

♪スコロヴァチェフスキ氏の丁寧でかつ潔い指揮に心を奪われた。ブルックナーの交響曲第4番は曲の神髄に迫るような感動する演奏だった。（田中久子さん）

♪素晴らしかった。この時間と空間を共有できた幸せ！（中原里奈さん）

コンサート会場でブルックナーの長大な交響曲を聴くと、その場に居合わせたお客様同士に連帯感のような感覚が生じることがあります。また、スコロヴァチェフスキのブルックナー演奏からは、他のどの指揮者にも真似できない独創性と先進性が感じられます。多くのお客様が一期一会の究極のブルックナー「体験」に酔いしれたことが、この公演を第1位に押し上

2位

指揮：スタニスラフ・スコロヴァチェフスキ

ベルリオズ／劇的交響曲
〈ロミオとジュリエット〉から
ショスタコーヴィチ／
交響曲第5番

第564回サントリーホール名曲シリーズ（10/2）
第3回オペラシティ・プレミアムシリーズ（10/3）
第67回みなとみらいホリデー名曲シリーズ（10/6）



©読響（撮影：青柳聡）

トロは軽くキューを出したあと黙祷のような姿勢でじっと耳を傾けていた。そして弦が出てくるところで全身を揺さぶるようにして、感動的な最初のテーマを繰り出す。うねるように波打つように。客席で全身が震えるような圧倒的な聴取体験でした。（辻永さん）

♪〈我が祖国〉をフルで聞いたのは初めてでしたが、引き込まれてしまいました。名演に立ちあえてとても嬉しく思います。後日発売されたCDも買いました。聞く度に何度でも感動がよみがえります。（小林慧さん）

〈我が祖国〉の演奏は、公演後1か月という異例の早さでライブCDが発売されたことでも話題を集めました。

第2位にランクインした3公演目は、絶大な人気を誇るマエストロ、上岡敏之が客演した公演。

♪オーケストラが、ドイツの地方のオーケストラを聞いているような味わいのある音を出していたのが印象に残りました。ブラームスの交響曲第3番は、今まで聞いた中で一番感動しました。上岡さんの細かい指示もきちんと表現されていて、オーケストラとの相性も良いと思いました。（石川友規さん）

お誕生日を一緒にお祝いできてとてもうれしかった。（中原里奈さん）

♪興奮した。若い、若すぎる。いつまでもお元気で！ 来期も絶対、聴きます。（金城昌芳さん）

スコロヴァチェフスキは今年10月にも来日し、ブルックナーの交響曲第0番とベートーヴェンの交響曲第7番を披露します。91歳となるマエストロと読響の共演を、どうぞお楽しみに！

第2位には、他にも2公演が同票数でランクイン。

スメタナの連作交響詩〈我が祖国〉は、名門チェコ・フィルで常任客演指揮者も務めた“炎のコバケン”こと小林研一郎（特別客演指揮者）が愛してやまない傑作。小林自身をして「これまでの人生で最高」と言わしめた演奏は、お客様にも大きな感動を与えました。

♪2台のハーブが静かな序奏を奏でる時、マエス

2位

指揮：小林研一郎

スメタナ／
連作交響詩〈我が祖国〉

第154回東京芸術劇場マチネーシリーズ（4/20）
第525回定期演奏会（4/22）



©読響（撮影：堀田力丸）

あなたが選ぶ
2013年の「感動の公演」
結果発表

ブラームスの交響曲第3番は、壮麗さとは全く無縁の「渋い」作品だとよく言われます。そのような作品でも「感動の公演」にランクインさせてしまうところに、上岡の非凡なセンスが現れています。

続いてランクインしたのは、これも同票数で2公演。われらが常任指揮者、カンブルランが指揮したマーラーの交響曲第6番と、デニス・ラッセル・デイヴィスが客演した年末の〈第九〉公演です。

♪カンブルランの卓抜な解釈。ダニエル・ゲーデをコンサートマスターに迎え、得意のパワーだけではなく、絹のようななめらかな音質を^{たた}滲^たえたオケ。そしてその両者の熱意と信頼関係により、鬼気迫る緊迫感に満ちた、まさに稀有な演奏会でした。これほどの高い水準の演奏を国内のオケで聴くことができるのだという思いに駆られた、当夜の興奮が今もまざまざと^{よみがえ}蘇ります。圧巻でした。(黒猫さん)

今回の「感動の公演」アンケートでは、カンブルランが指揮した他のコンサートにも多くの絶賛のコメントをいただき、指揮者別得票数ではカンブルランが堂々の第1位に輝きました！

5位
指揮：シルヴァン・カンブルラン
**マーラー／
交響曲第6番〈悲劇的〉**
第153回東京芸術劇場マチネシリーズ (3/16)
第558回サントリーホール名曲シリーズ (3/18)
第524回定期演奏会 (3/19)



©読響(撮影：堀田力丸)

2位
指揮：上岡敏之
ピアノ：デジュ・ランキ
**ブラームス／
ピアノ協奏曲第2番
ブラームス／交響曲第3番**
第532回定期演奏会 (11/22)
第160回東京芸術劇場マチネシリーズ (11/24)



©読響(撮影：青柳聡)

〈第九〉公演を推すコメントも多数寄せいただきましたが、ここでは最も短く凝縮されたものをご紹介します。

♪読響の〈第九〉が一番好きです。もう何もいらない！(笑)(やまるみさん)

やまるみさん、ありがとうございます！ 今年の年末もよろしくお願いします！

人間の力だけで全ての音を生み出すオーケストラ。それだけに生演奏には色々な発見があり、コンサートにはさまざまな出会いがあります。ここからは、そのような「発見」や「出会い」を^{つづ}綴っていたいただいたコメントをご紹介します。

♪サイン会でカンブルランさんに握手してもらった際、「また必ず聴きにきます」と言ったら「Good Idea!」と返してくださいました！(足立功さん)

♪終演後の「読響カフェ」でカンブルランさんから〈春の祭典〉のスコアにサインをいただき、お話もできました。マエストロがとても気さくで楽しい時間を過ごしました。このようなイベントはとても楽しみです。(東雄一さん)

読響では来シーズンも、カンブルランのサイン会や読響カフェなど、お客様と音楽家が触れ合う機会をできるだけ作ってまいります。お時間の許す方はぜひご参加ください。

♪コンサートマスター、ダニエル・ゲーデ氏の柔らかな表情と人柄が身近に感じられた。〈第九〉公演／田中久子さん

♪ブラームス1番を目当てで初めて読響を聴きにきて、いきなりハマってしまった。この日、ヴァイオリンの6ブルト表(編注：第1ヴァイオリン客席側の最後尾)に福田高明さんが座っていなかったら、今こんなに読響の大ファンになっていなかっただろう。ベテランのオジサンたちの底力は読響の大きな魅力。(9月20日《読響カレッジ》／中原里奈さん)

読響では、演奏者一人一人の魅力が集まって楽団全体の大きな魅力となり、お客様に伝わるものと考えています。田中さん、中原さん、これからも魅力あふれる読響奏者にご注目ください！ それにしても、「ベテランのオジサンたち」に着目されるとは、なかなか通ですね。

♪10月末に家内の母親が不慮の死を遂げました。家族全員が落ち込んで、暗い気持ちで2か月が過ぎていきました。家内と二人で行こうとこのコンサートのチケットを購入していましたが、行こうかどうか迷っていました。でも、気分転換のためにもと思い、出かけることにしました。デニス・ラッセル・デイヴィスさんの〈第九〉はゆったりしたテンポでとても優しく感じました。読響の弦の響きもとても素敵でした。壮麗な合唱が終わる頃には夫婦で来年に向かって頑張ろうという勇気をいただいております。本当に有り難うございました。(〈第九〉公演／東雄一さん)

私たちの音楽が誰かの支えになっていたのだということを知り、逆にこちらが勇気づけられる思いです。東さん、コメントを寄せていただきありがとうございました。読響はこれからも、お客様へ一期一会の音楽体験をお届けできるよう、心をこめて演奏に取り組んでまいります。ぜひ来シーズンも、コンサート会場で生演奏をお楽しみください。(編集部)

※編集の都合上、コメントの一部を改変しています。

5位
指揮：デニス・ラッセル・デイヴィス
独唱：木下美穂子、林美智子、
高橋淳、与那城敬
合唱：新国立劇場合唱団
(合唱指揮：三澤洋史)
**ベートーヴェン／
交響曲第9番〈合唱付き〉**
2013年〈第九〉公演 (12/18,19,20,21,23,25)



©読響(撮影：青柳聡)